

興福寺中金堂院回廊の調査

—第347次

1 はじめに

今年度は、1998年度に開始された興福寺第1期境内整備事業にともなう中金堂院発掘調査の第5年度にあたる。中門、中金堂院回廊東北部と中金堂前庭部、中金堂につづいて、今回は中金堂院回廊東南部の発掘を行った。中金堂院の東面回廊・南面回廊と回廊内庭部を含むL字型の調査区を設定し、981㎡について調査した。

本調査では、回廊東南部の様相を明らかにするとともに、東面回廊に開く門の検出や、門の南北で異なると思われる桁行方向の柱間寸法の解明も期待された。

発掘調査は2002年7月1日から開始し、11月1日に終了。東面回廊の南半と南面回廊の基壇や外周の雨落溝、石敷を検出したほか、東面回廊に取り付く階段を検出し、その位置から回廊に開く門の位置を確定した。中金堂院内庭部では、瓦の廃棄土坑などを検出した。

本調査の概要は『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅳ』（興福寺、2003年）にて公表した。

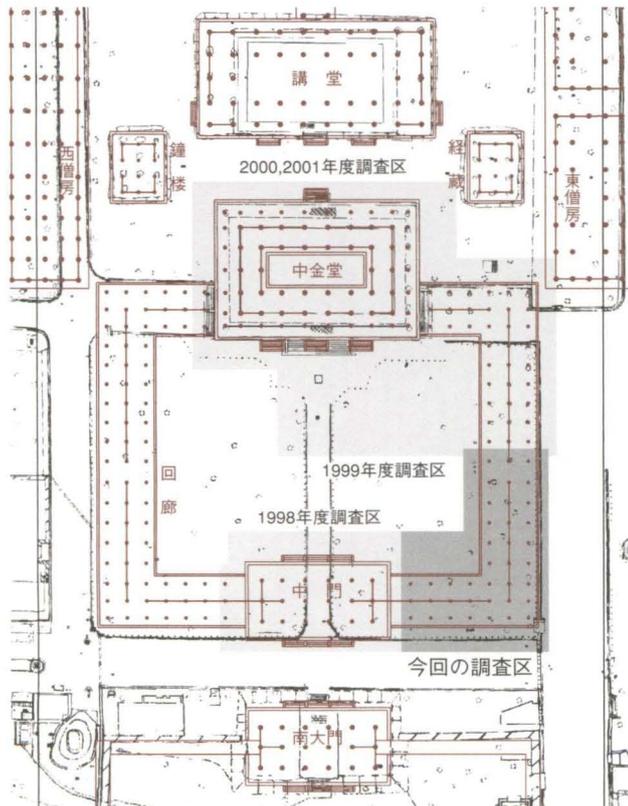


図142 第347次調査区位置図

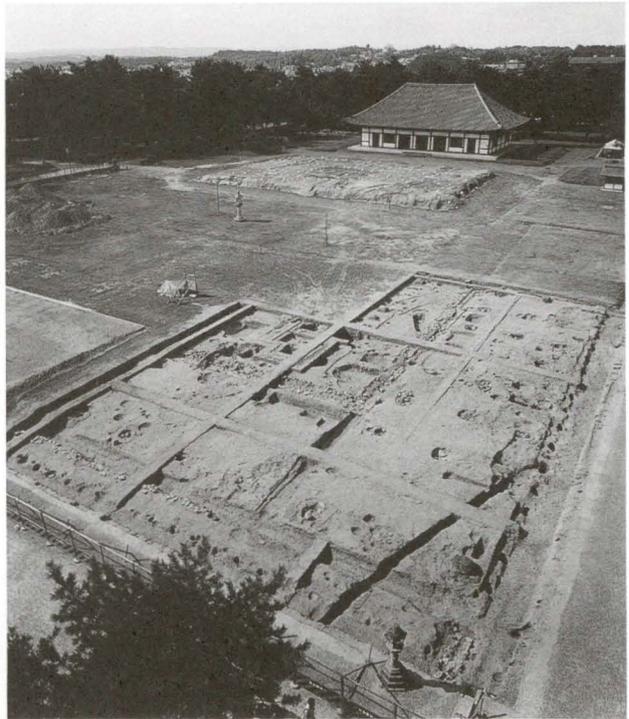


図143 調査区全景

2 回廊と「楽門」

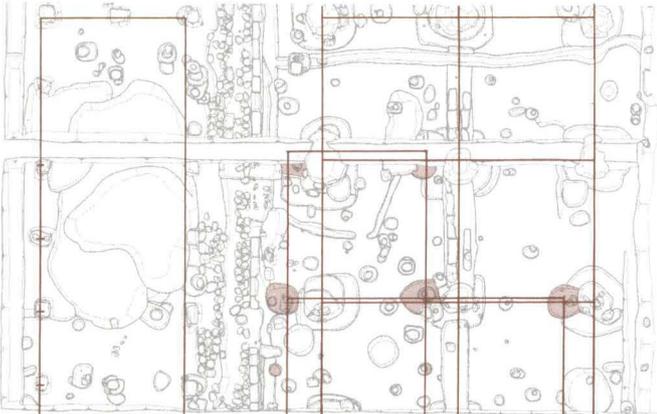
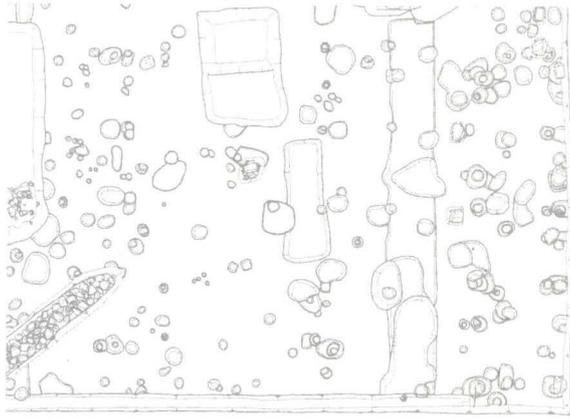
興福寺の回廊建物は、絵図などの記録によれば、梁行2間で棟通りに連子窓をいれた壁が通り、両側が吹き放しとなる複廊であった。東西回廊の中程には「楽門」が開いていた。『肝要絵図類聚抄』（15世紀、興福寺蔵）や『興福寺建築諸図』（17世紀頃、東京国立博物館所蔵）所収の回廊平面図には、東西回廊のほぼ中央に「カク門」「扉」の記載がある。この「楽門」を境に、南北で回廊の桁行方向の柱間が異なることは、『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図に記された柱間寸法からわかる。

『興福寺流記』所引の『宝字記』には「小門八口」とあり、天平宝字年間に中金堂院回廊の四面に門が開いていたと考えられる。「楽門」の記載は、永承3年（1048）の再建供養を記録した『造興福寺記』に「東廊楽門」、「西廊楽門」とみられるほか、建久5年（1194）の『興福寺供養次第』でも「東西楽門<廻廊中央戸>」とある。

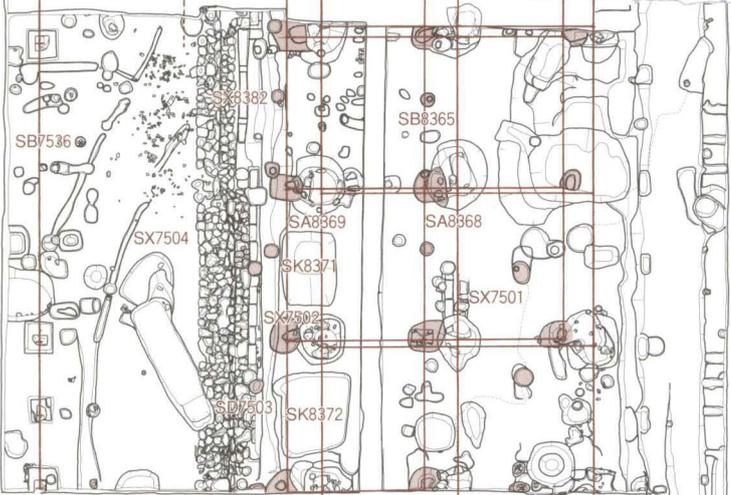
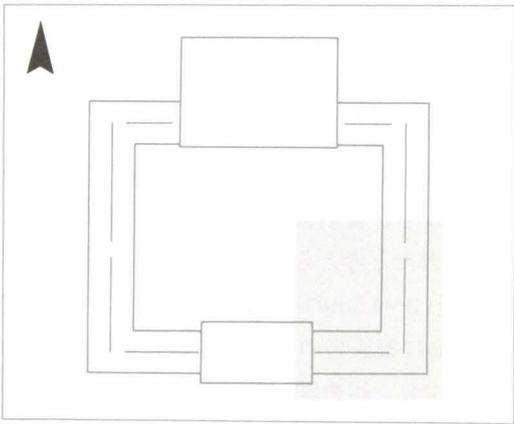
これらの記録によれば、再建供養の際に回廊は通路として利用されず、衆僧の座や音楽を奏する楽所が設けられた。中金堂院の入場時には、導師、呪願師、衆僧、公卿など儀式的参加者のほとんどが中門を通り、式部省・弾正台の官人や、堂童子を務める四位五位の官人が楽門を利用した。法会の記録からは、今回検出した回廊や「楽門」などの往時の姿がうかがえる。 （山本紀子）

Y-15.190

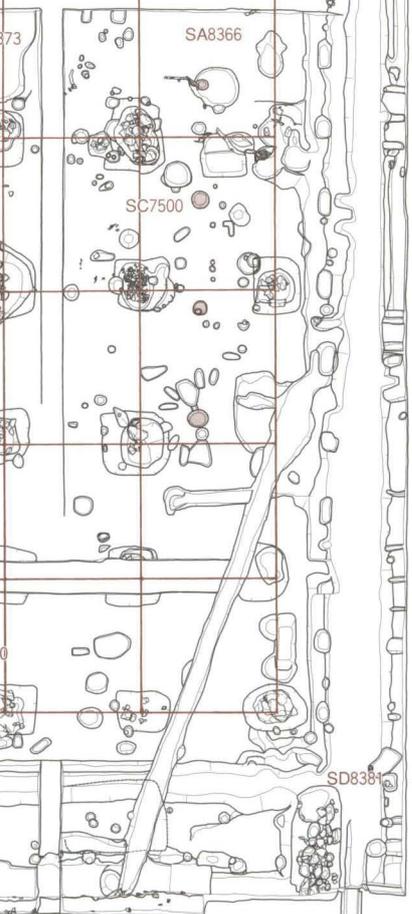
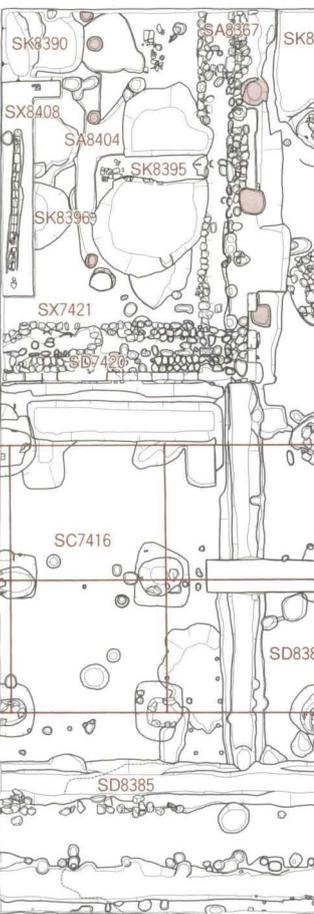
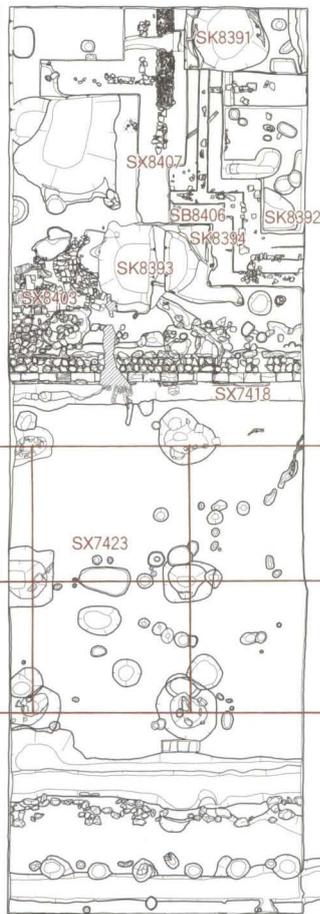
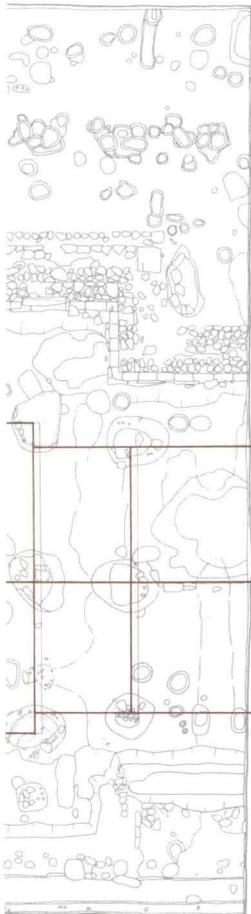
Y-15.170



X-146,440



X-146,460



X-146,480



図144 第347次調査遺構平面図 1:200

3 検出遺構

1998年度の中門、1999年度の回廊東北部の調査では中金堂院の東北から中門東半へとつづく谷筋を確認した。この谷筋は、本調査区の東北隅から中央をとおり調査区の南へ抜け、今回検出した中金堂院内庭部と南面回廊は谷筋にあたる。寺地の造成は、谷を一定程度埋め立てた後、埋め立てとは別の土で整地していることを明らかにした。谷底までの深さは内庭部の遺構面から約1.6mある。

回廊基壇

回廊基壇部分の築成は、谷を暗茶灰色の砂質土で厚さ80cm前後埋め立てた後、地山由来の礫混じり橙黄色砂質土を厚さ40cmほど水平に整地する。基壇部分は整地土に似た土を整地面より20cmほど積み上げて築成し、粒度の細かい黄灰色土を版築して仕上げる。谷筋東側の東面回廊基壇は、礫を含む橙黄色白斑砂質土の地山を削り出し、上面に地山由来の土を積み上げ築成している。**東面回廊SC7500** 梁行2間、南面回廊と交わる東南隅部を含めた桁行8間分を検出した。遺構面の標高は94.9～95.3mで北が高く南は低い。基壇外装地覆石上面との比高差は、残りのよいところで約25cm、礎石上面との比高差は40～45cmあり、基壇上面はかなり削られている。

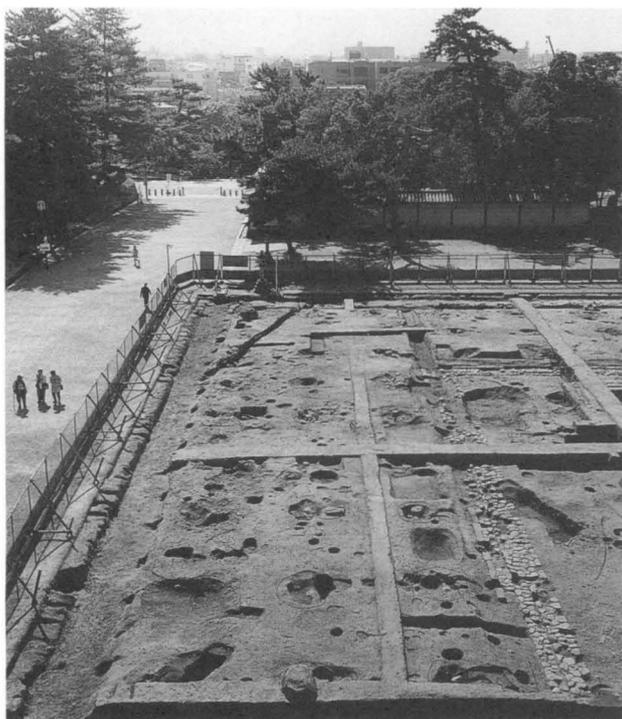


図145 東面回廊（北から）

回廊の礎石は2基のみ残存する。いずれも三笠安山岩で、径0.9～1.2mの自然石を使用する。棟通り柱筋北端の礎石には暗灰色砂質土の掘り込みがあり、抜き取りあるいは据え替えを意図した痕跡が認められるが、礎石の位置は据え付け当初と変わらないとみてよいだろう。東側柱筋東南隅の礎石は原位置を保つ。

そのほかの柱位置は礎石抜取穴として確認した。抜取穴の一部には長さ30～50cmの河原石の根石が据えられた状態で残存し、礎石の破砕片が投げ込まれていた例もある。礎石抜取穴からは、近世後半以降の瓦片やガラス片が出土していることから、礎石は江戸時代末から明治時代にかけて抜き取られたと考えられる。礎石据付掘形は長径1.5～1.8m、短径1.3～1.5mの不整形が多い。

SX7501は棟通り柱筋に凝灰岩の切石を2列に並べた地覆石列である（第146図）。幅約20cmの切石は15cmほど間隔をあけて配列され、各石列は別々の掘形を掘削して据えている。これは回廊中央を通る間仕切りの地覆と地長押を受ける施設であろう。

南面回廊SC7416 梁行2間、桁行4間分を発掘した。基壇上面の標高は94.9～95.2mで、南側は削平され北ほど残りがよい。回廊北辺の基壇外装地覆石上面との比高差は最大で約30cmある。

礎石は残存せず、柱位置は抜取穴と据付掘形によって確認した。北側柱筋では据付掘形を覆う基壇積み土が薄く残存する。棟通り柱筋上には凝灰岩片を多く含む浅い掘り込みがあり、南面回廊の中門取り付け部で検出した棟通り地覆石SX7423の抜き取り痕跡であろう。

回廊基壇幅は東面、南面回廊ともに約10.8m、基壇の出はそれぞれ約1.9mに復元できる。



図146 地覆石列SX7501（東南から）

掘立柱建物SB8365 東面回廊基壇上の中央部に位置する南北棟の建物。東北隅、東南隅の2柱を欠く桁行5間、梁行2間で、本調査区では建物南半の桁行3間分を検出し、北半は1999年度調査区に及ぶ。桁行柱間寸法は約4m、梁行は約3.6m、柱穴の径は約80cm、柱穴底部には自然石の礎盤石を据える。柱穴は回廊の礎石据付掘形の西辺に位置し、礎石据付掘形を掘り込み、礎石抜取穴によって切られることから、この建物の柱は礎石の西に沿う形で建てられたと考える。

柱列SA8366～SA8369 SA8366は東面回廊の東側柱筋西側に位置し、南北に並ぶ約3m等間の柱列。SA8366の西側約7mにはSA8367がある。両者は柱間が等しく、柱位置も対応する。SA8368はSA8366、SA8367の北側にあり、東面回廊の棟通り柱筋上に約2m間隔で南北に並ぶ柱列。西側にはSA8369が並列する。両者とも柱列の北端は1999年度調査区に及び、掘立柱建物SB8365の柱穴を切り込む。**土坑SK8371～SK8373** 東面回廊の西側柱筋上に位置する土坑。平面形は不定で、長さ2～3m、幅2mほどある。近世後半の遺物を含み、礎石据付掘形の間にあることから、掘削当時、礎石は存在していたと考えられる。

上述の掘立柱建物、柱列、土坑は、位置や出土遺物の年代などから、回廊の建物が存在する時期のものとは考えにくく、享保2年(1717)の火災以降の遺構と推定する。

基壇縁と外周の遺構

東面回廊の東側や南面回廊の南側は、現代の排水溝や近代の陶磁器片を含む溝SD8385によって壊されており、石材はすべて抜き取られていた。近世の遺物を含む東面回廊西側の溝SD8383、南面回廊北側の溝SD8384の下で基壇外装、雨落溝、石敷を検出した。

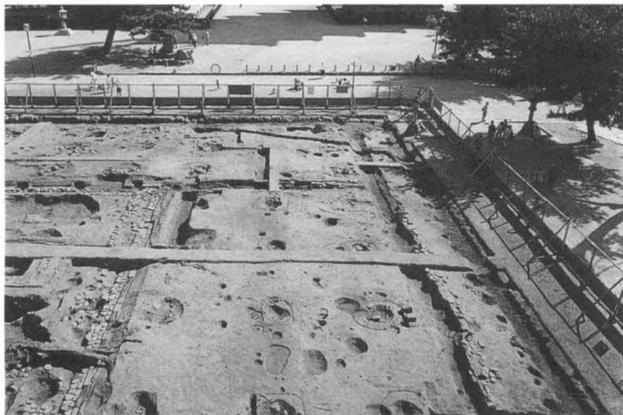


図147 南面回廊(西から)

基壇外装SX7502・SX7418 SX7502は東面回廊基壇の西縁基壇外装で北半の残りがよく、南面回廊北縁SX7418の残存状況は良好である。両者とも凝灰岩の切石を用いた基壇外装で、地覆石と羽目石の一部が残存している。地覆石は幅20～25cm、長さ37～50cmの切石で上面は平坦に仕上げているが、羽目石を組み合わせる仕口や東石をはめるほぞ穴はない。凝灰岩には硬軟の差が認められる。

羽目石はすべて軟質の凝灰岩で、下端部に切り欠きを施して地覆石の背面にはめ込んでおり、その下端部のみが残存している。葛石は確認していないが、外装全体は東石のない壇上積基壇であろう。SX7502地覆石上面の標高は94.95～95.06mと南に向かって徐々に傾斜し、SX7418は94.83～94.90mで西に傾斜する。

雨落溝SD7503・SD7420 基壇外装地覆石の内庭側に石組みの雨落溝を構築する。東面回廊西側のSD7503と南面回廊北側のSD7420は、径20cm前後の河原石を2列に敷き並べ、幅約40cmの溝底を形成する。溝の内庭側には河原石を立てて側石とし、基壇側は地覆石を溝の側壁とする。SD7503底石上面は94.85～95.00m、SD7420は94.78～94.88mで、北から南、東から西へ向かって傾斜している。地覆石上面と雨落溝の底石上面との比高差は5～8cm、側石上端との差は8～15cmある。

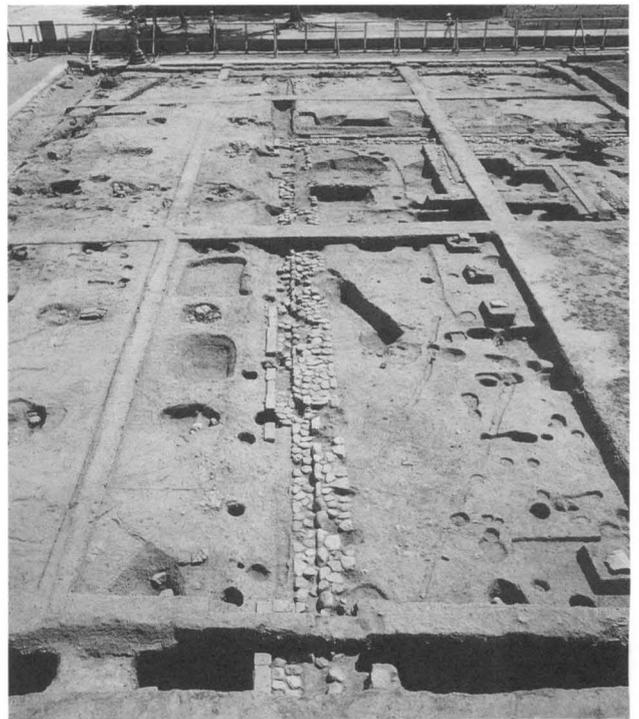


図148 東面回廊西側基壇外装と外周遺構(北から)

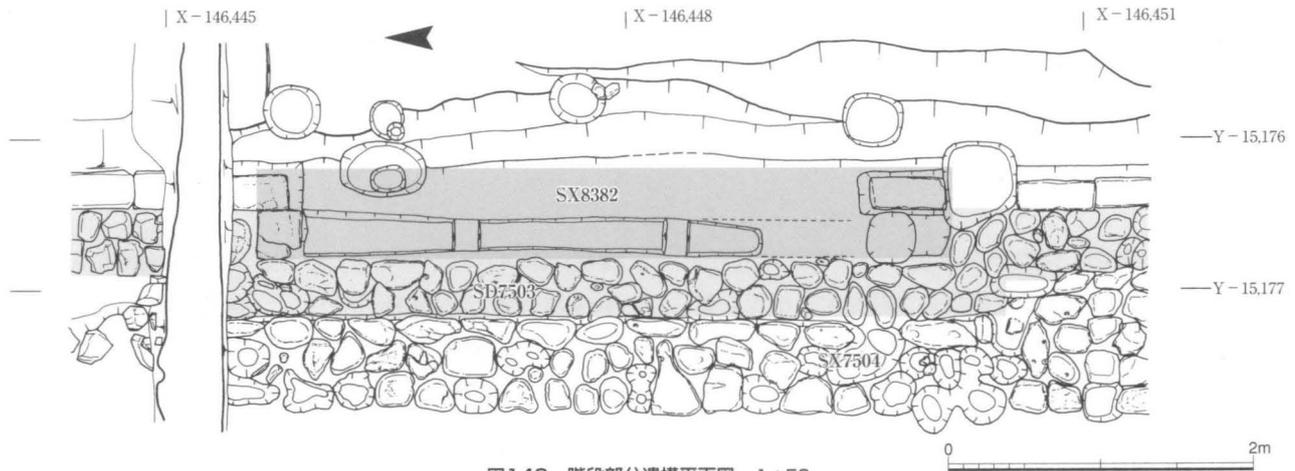


図149 階段部分遺構平面図 1:50

石敷SX7504・SX7421 東面回廊西側のSX7504は内庭側に見切石を並べ、溝側は雨落溝の側石を基準に径20～40cmの河原石を4列に敷き並べ、溝側にわずかに傾斜させる。雨落溝の側石を含む幅は約90cm。南面回廊北側のSX7421は、内庭側の見切石1列の残りはよいが、そのほかの敷石は側石とともに抜き取られている。雨落溝SD7420との関係を見ると、SX7504と同様の構造と規模と考える。

暗渠SD8380 雨落溝SD7503の水を南面回廊基壇の南側に排水する暗渠である。蓋石や側石、底石は残っていないが、溝埋土最下層に含まれる凝灰岩の細粒や碎片から、元来は凝灰岩切石組みの暗渠であったことがわかる。暗渠北端にのこる凝灰岩切石片上面の標高は雨落溝SD7503の底石と一致することから、暗渠への入水口であろう。

溝SD8381 回廊東南隅から南へのびる石組みの溝。東面回廊東側の現代溝下で検出した。溝の掘形北端は南面回廊南側のSD8385に接し、南端は調査区外へつづく。幅

約1.3mの掘形中央に径20cm前後の平坦な石を2列に敷き並べて底石とする。西辺には側面を垂直に加工した側石を据え、溝東辺には側石の抜取穴を検出した。溝の幅は約40cm、底石上面と側石上面の比高差は約15cmある。

階段SX8382 東面回廊SC7500西辺に取り付く階段である。踏石や階段の築成土は残存していないが、調査区北端にある基壇外装SX7502の地覆石の西側に横方向に据えた地覆石があり、雨落溝SD7503はこの地覆石を迂回して西側に張り出している(第149図)。雨落溝SD7503の東辺には地覆石の抜き取り痕跡を検出した。基壇外装西側の地覆石は階段北側の羽目石をのせるもので、その南につづく抜き取り痕跡は階段前面の地覆石にあたる。

階段北側の羽目石をのせる地覆石は長32cm、幅30cm、地覆石の長さから階段の出は約30cmとわかる。階段南側の地覆石は残存しないが、雨落溝SD7503が屈曲する位置を階段の南側と考え、その位置に地覆石を想定した場合、階段地覆石の外面間は約4.5mに復元できる。

回廊基壇高の復元を試みる。調査区の北端に残る礎石上面の標高95.64mと、基壇外装SX7502の北端に位置する地覆石上面の標高95.05mとの比高差は0.59mある。礎石上面と基壇上面との比高差を約2寸、基壇端までの水垂れ勾配を1寸と見積もると、推定基壇高は約0.5m(1尺7寸)となる。この基壇高から、地覆石の上に1尺角ほどの段石を1段設けた階段であったと推定する。

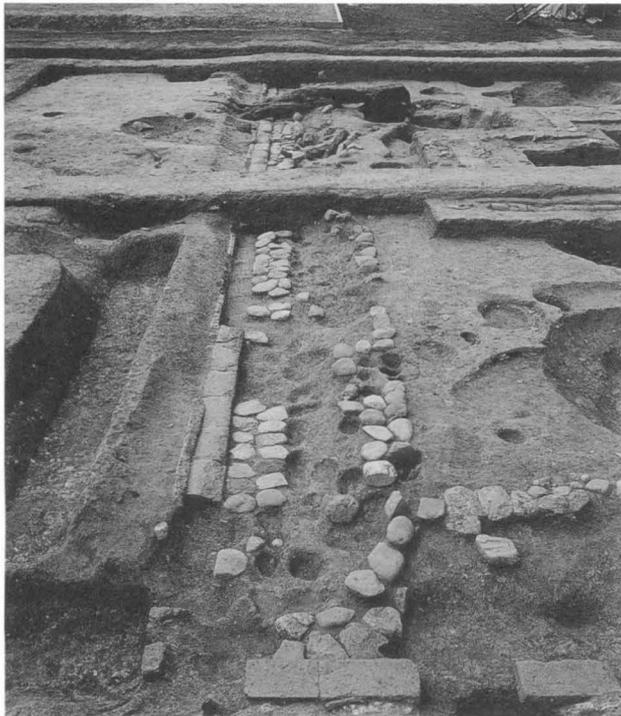


図150 南面回廊北側基壇外装と外周遺構(東から)



図151 階段(西から)

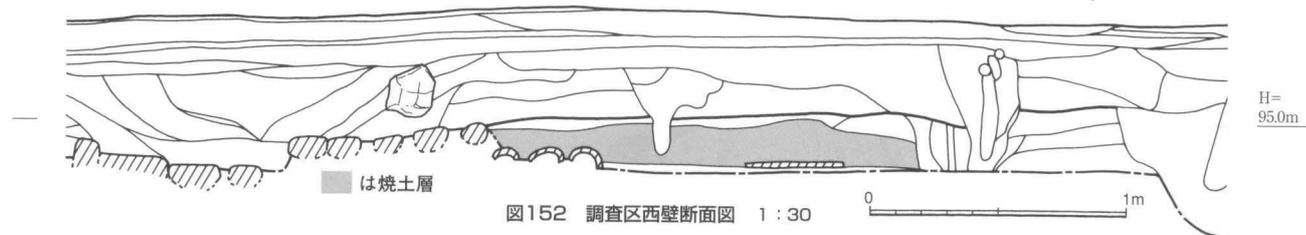


図152 調査区西壁断面図 1:30

東面回廊西辺の基壇外装SX7502は、階段の幅に対応する範囲の地覆石が抜き取られており、これを切る形で階段北の地覆石が据えられていることから、階段は基壇外装の地覆石を抜き取った後に構築したことになる。基壇外装の地覆石敷設後、すぐに地覆石を抜き取り階段を構築する工程差とみるか、階段のない時期があり、後に階段を新たに構築する時期差とみるか、判断しがたい。

この階段の位置と幅は、階段の東側に位置する東面回廊の桁行柱間1間分に相当することから、階段に対応する門の位置を明らかにすることができる。これは文献に記載のある「楽門」にあたりと考える。

内庭部の遺構

表土を取り除くと近世以降の建物遺構がいくつか検出され、茶灰色砂質土の包含層を下げると、石敷などが検出される。内庭面にはごく薄い白色砂の層がひろがり、瓦片が埋め込まれた部分がところどころにみられる。

廃棄土坑SK8390～SK8396 土坑の形状は不定で、大きさも径2～5mと一定しない。土坑は瓦とともに赤褐色の焼土が含まれ、火災時に生じた廃棄物を処理したものであろう。SK8390～SK8393からは奈良～平安時代の軒瓦が出土し、SK8395からは奈良時代から中世の軒瓦が出土している。これらの土坑には時期差があると想定できる。

瓦敷地業SX8403 調査区西辺の断ち割り調査で、内庭部の白色砂層の下に赤褐色の焼土層が検出された。焼土層は20cmほどの厚みがあり、その下半から瓦が出土した。丸瓦、平瓦が多く、軒丸瓦、軒平瓦も含まる。瓦は内庭部整地土の上に置かれ、向きは不揃いだが西半に平瓦がまとまり、東半では丸瓦が上下に重なる(第153図)。古代の丸瓦、平瓦が多く、軒瓦はすべて奈良時代である。



図153 SX8403瓦敷地業(北西から)

瓦の出土状況からは、回廊の屋根からの崩落や単なる遺棄とは考えにくい。焼土層は石敷SX7421北辺から1.8mほど北の瓦が出土する範囲に限られ、南はSX7421の下にもぐり込む。焼土層上面の標高は内庭の遺構面と一致することから、火災後この部分を削り込み、瓦を置き土をかぶせた後にSX7421を敷設したことがわかる(第152図)。

柱列SA8404 瓦廃棄土坑SK8395の西側に南北に並ぶ柱列。柱筋や柱間は一定ではないが、径40cm前後の柱穴内には完形の丸瓦が縦に据えられ、底に自然石の底石を置く。法会時に幡などを立てる穴の可能性はある。

仮設建物SB7536 南北棟の礎石建物で桁行6間分を検出した。1999年度の調査で確認した礎石建物の南半部にあたり、既調査分と合わせて桁行12間、梁行2間の建物となる。礎石は一辺30～40cmの方形で、礎石の心心間の距離は1.95mある。近代の遺構と考えられる。

建物SB8406 内庭部南半に位置し、長さ20cm前後の

不定形の石を置き並べ、建物の基礎と思われる。雨落SX8407はSB8406の西側に南北に伸びる幅約50cmの施設で、破碎した平瓦を木端立てしている。丸瓦列SX8408は建物SB8406の東側に南北に伸びる施設。以上は建物SB8406にともなう施設と考える(第154図)。

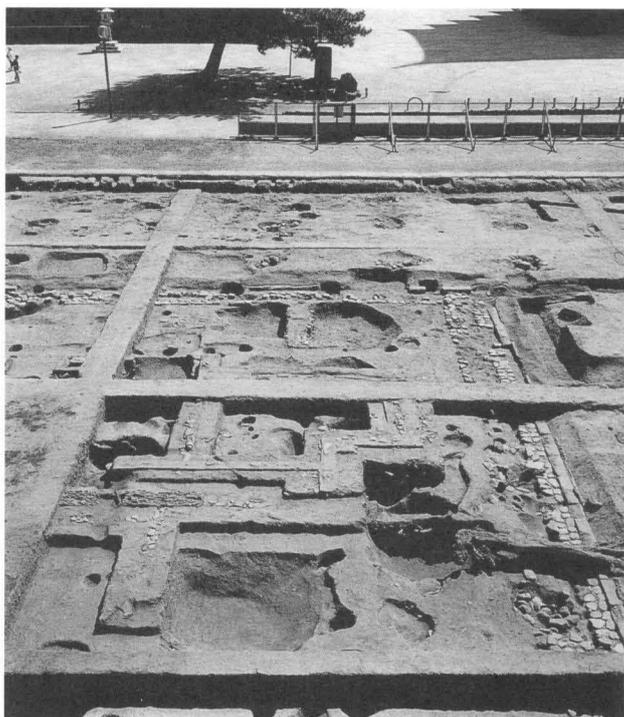


図154 内庭部南半(西から)

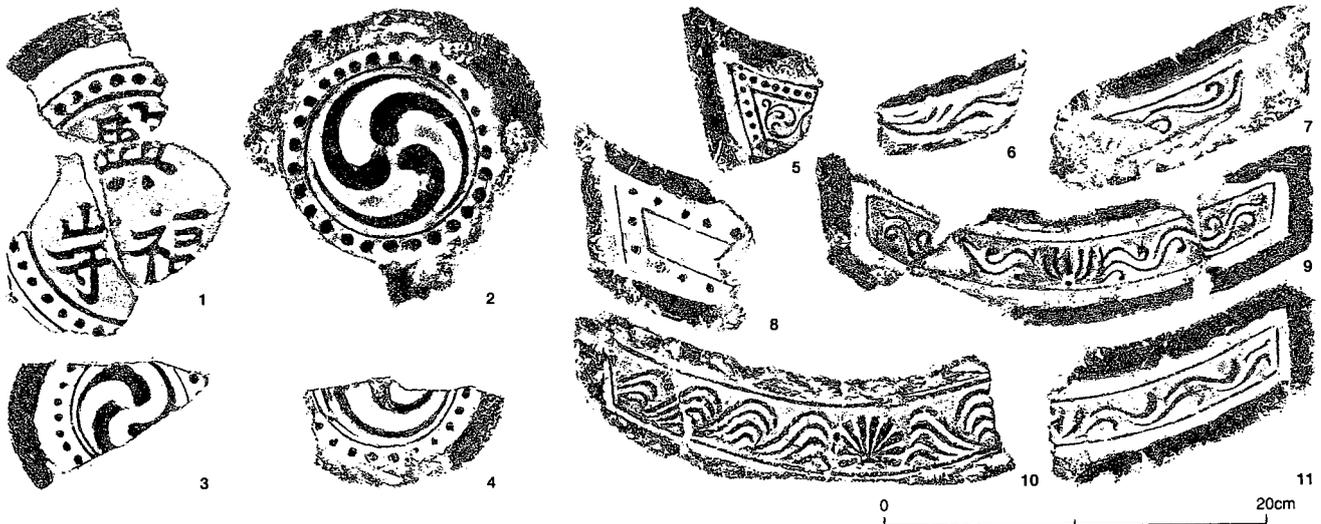


図155 出土軒瓦 1:4

4 出土遺物

瓦

今回の調査で出土した瓦は軒丸瓦111点、軒平瓦128点、丸瓦約14000点、平瓦約30000点、道具瓦14点、瓦の時期は興福寺の創建から近世までに至る。創建期から平安時代までの瓦は『興福寺概報Ⅳ』で紹介したので、ここでは中世の瓦について概述する。

軒丸瓦 1は「興福寺」の文字瓦で外区に珠文がめぐる。赤焼きで焼成もよくない。『興福寺食堂発掘調査報告書』（奈良国立文化財研究所、1959年、以下『食堂』と略称）の86と同范で、鎌倉時代の軒丸瓦である。2は右巻きの三巴文で外区に珠文がめぐる。3、4は左巻きの三巴文で外区に珠文がめぐり、2より小ぶりである。以上は室町時代の軒丸瓦である。

軒平瓦 5は外区に珠文をかざる唐草文の軒平瓦で、中央に「興福寺」銘がある『食堂』99と同范。6と7は外区素文の唐草文である。以上は鎌倉時代に属する。8は外区に珠文をかざる「興福寺」文字瓦で、『興福寺防災施設工事・発掘調査報告書』（興福寺、1971年）の188と同范である。9は中心に半裁蓮華文をかざる唐草文。10は中心に半裁菊花文、左右に水波文をかざる。東大寺に同范例がある。11は中心に3弁の花文をもつ唐草文である。以上は室町時代の瓦であろう。

表21 第347次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		瓦			
型式	種 点数	型式	種 点数	型式	種 点数		
6235(興45)	2	平安	9	6561(興508)	A 1	興759	2
6271(興50)	1	中世	12	6667(興538)	A 1	興810	2
6301(60)	A 10	近世	13	6671(興540)	A 21	興817	1
	?	近世後半	1		? 9	興892	1
興111	2	近世後半以後	1	6682(興552)	D 8	興911	6
興123	1	近世後半以後(文字紋)	1		G 1	興913	2
興130	1	菊丸	1		? 1	平安	13
興215	1	型式不明(奈良)	4	6711(興568)	B 3	鎌倉	3
興305	3	型式不明	14	6732(興580)	E 1	室町	2
興318	1			6739(興583)	A 3	中世	15
平安巴	1			6763(興585)	C 1	近世	7
中世巴	15			興615	1	近世後半	14
近世巴	13			興621	1	型式不明	6
中近世巴	1			興671	2		
軒丸瓦計			110	軒平瓦計			128
重量	2642.8kg	平瓦	5411.4kg	道具瓦	3	鳥衾	1
点数	13936		30005	面戸(スタンプ1点含)	5	隅切平瓦	2
				丸瓦(スタンプ)	23	刻印平瓦	2
				平瓦(スタンプ)	20	へら書瓦	2
重量	26.3kg		53.3kg	近世留蓋	1	用途不明	3
点数	9		53				

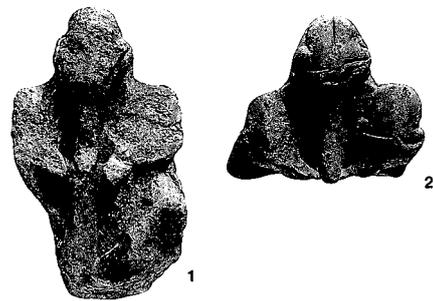


図156 桐文瓦

図156-1は道具瓦で、残長15cm、最大幅8.8mmある。下端は割れ面で全体の形は不明だが、桐文のつぼみ部分であろう。つぼみと茎は、厚さ3cmの土台上に最大1.8cmの厚みをもつ浮き彫り状につくる。全体は型づくりで、時期は安土桃山時代ごろと考える。類例が興福寺講堂跡から出土している(図156-2)。(今井晃樹)

土器

まとまった資料について概述する。廃棄土坑SK8395から出土した土師器皿は、いずれもやや赤みを帯びた淡褐色を呈し、11世紀後半の様相を示す。1～3は器高が低く、強い横ナデで口縁部を引き出し、口縁端部を丸くおさめる。底部外面はゆるくナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。4～6は平らな底部とまっすぐに広がる口縁をもつ。口縁端部は比較的強いヨコナデが施され、やや外反する。全体的にナデ調整で仕上げるが、底部には指頭圧痕が残る。4、5は油煙の痕跡が残る灯火器であろう。7は比較的大形の皿。口縁端部はヨコナデされ外反する。外面は比較的丁寧なナデ調整を施すが、指頭圧痕が残る。

内庭部の包含層からは江戸時代の土師器皿、陶磁器がまとめて出土した。土師器は、淡茶褐色で焼きしまる。大小2種の規格があり、8～12は径約7cm、器高約1.5cmの小皿で、8以外は油煙の痕跡が残る。13～15は径約10cm、器高約2.0cmの皿で、14・15は油煙の痕跡を残す。いずれも灯火器であろう。16は染付の茶椀で、見込みに無釉の重ね焼き痕を残す。(神野恵)

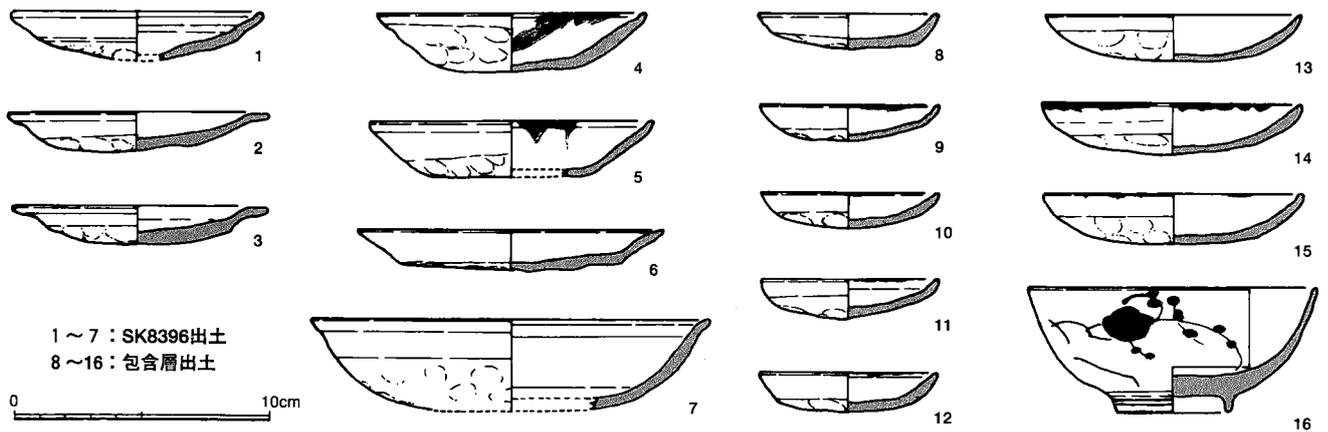


図157 出土土器 1:3

銭貨・金属製品

調査区内から計82点の銭貨が出土した。銭種の判明する75点のうち、北宋銭3点（寧元寶1・元符通寶1・元豊通寶1）、寛永通寶46点、文久通寶3点、近代の銅銭18点、現行硬貨5点であった。

鉄製品の多くは釘で、49点ある。銅製品には鑄造品の小片や、鋏などの飾金具や銅針金がある。（井上和人）

石材

石材は回廊基壇外装の地覆石と羽目石など21点が出土した。石質は、軟質の流紋岩質凝灰角レキ岩（二上山〜ドンズルポー産。凝灰岩A）と、硬質の流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。凝灰岩B）に大別できる。主に内庭部上層の包含層から出土した。

回廊地覆石 地覆は10点あり、1点をのぞいて凝灰岩Bである。断面寸法は幅19~22cm、厚7~9.5cmで、計画寸法は幅7寸、厚2.5~3寸とみなせる。長さを完全にのこすものでも27~30cmで、回廊基壇縁に残る地覆と比べるとやや短い。上面には、幅8.5~16cmの風蝕面があり、残り8.5~10.5cmは平滑な加工面を残す。幅7寸のうち風蝕のない3寸に羽目石がのると想定する。

回廊羽目石 羽目石は9点あり、すべて凝灰岩Aである。地覆石との仕口の形状は、羽目石の裏から厚み6~8.5cm、高さ3.5~5.5cm以上の突部を残して表側を欠き取る。突部の設計寸法は厚み2寸以上であろう。高さ1.5寸以上、羽目石の厚みは地覆石上面の風蝕差を考慮して、6寸程度であったと推定する。

羽目石02（図158）は、溝SD8383出土。幅32cmで仕口の突部が残り、厚7.5cm、高4cmを地覆石裏面に落とし込んだと考える。地覆石に接する面は平滑に仕上げられており、下端面と裏面はやや粗い加工面が残る。

基壇外装の復原 遺構の地覆石には凝灰岩A・Bが混用される。凝灰岩Aが当初材、凝灰岩Bは改修時の補填と考えられる（『概報II』）。羽目石は遺構・遺物ともに凝灰岩Aである。仕口を羽目石側だけに施しており、加工性の高い凝灰岩Aが用いられたのであろう。（長尾充）

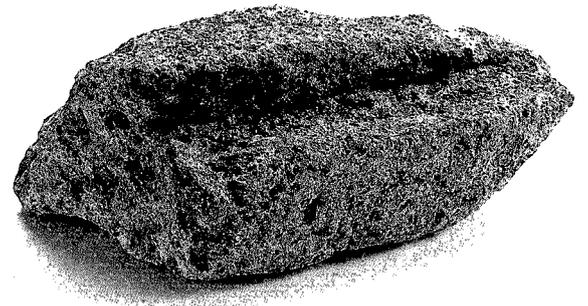


図158 羽目石02（背面を下にして撮影）

5 結 語

本調査と1999年度の調査で、中金堂院の東面回廊を全面発掘した。以下、東面回廊についてあらたに明らかになった点をまとめる。

東面回廊の全長は、東側柱筋北端（回廊東北隅）の礎石と、東側柱筋南端（回廊東南隅）の礎石との心心間の距離で65.13mあり、大宝令小尺に換算すると220尺となる。今回検出した階段と門の中心軸が一致すると仮定し、階段の中軸線と門北側の礎石心との距離から復元した門の柱間寸法は4.42m（15尺）である。回廊東北隅の礎石心と門の中軸線との距離は35.55m（120尺）、回廊東南隅の礎石心と門の中軸線との距離は29.58m（100尺）ある。門以北の桁行柱間寸法は、120尺から北隅部桁行2間と門15尺の半数を引いた値を桁行7間で割ると12.6尺となり、門以南の5間は同様の計算で13.7尺となる。門の南北で桁行柱間寸法が約1尺異なることになる。

東面回廊は門の中軸線を境に以北が120尺、以南が100尺になることからみて、門が回廊設計の基準であることが判明した。この中軸線が中金堂前庭部にある石敷SX7550の南辺と中門北の石敷SX7421北辺との間の距離を等分する位置にあることも明らかになった。また中軸線の東西両端は、東金堂前と西金堂跡前にある灯笼の中心点（東西金堂の中軸と考える）と一致する。

門（楽門）の位置は、回廊設計の基準というだけでなく、中金堂院全体あるいは院周囲の建物とも関連していたことがうかがえる。（今井晃樹）